

# プラトン『パイドン』における死の練習と哲学探求について

松井 貴英

## 序

ソクラテスの最期の日を舞台として描かれるプラトン『パイドン』において、ソクラテスと彼の最期に立ち会うために集まった仲間たちとの間で、いくつかの対話が展開される。そこでは、魂の不死証明を対話篇の主要テーマとしつつ、哲学探求とその達成の可能性についての対話も行われる。

本論文では、『パイドン』においては、真に哲学探求する者によるアイデアの知識の探求の達成が絶望的なまでに困難であることに関わる、いくつかの問題の検討がなされる。具体的には、肉体や感覚が哲学探求においてどのようなものであるのか、それを肯定的に解してよいのか、あるいは肯定的に解することはできないのかといった問題や、探求するものにより探求のレベルが異なることに関する問題が、ソクラテスが発言の中で用いる思考（διάνοια）と推論（λογισμός）のふたつの語に焦点を当てつつ、また魂の浄化（κάθαρσις）にも言及しつつ、検討される。また、ソクラテスが「できる限り」（ὅτι μάλιστα）と述べていることに関しても考察しつつ、プラトンが、『パイドン』におけるソクラテスとその仲間たちとの間で問答が展開され始めて間もない箇所における対話の展開の中で、哲学探求の、あるいはその達成の可能性を説明するため、どのようなものに活路を見出そうとしているのかについても、検討が試みられる。

本論文は、『パイドン』における哲学探求に関する考察の一部である。それゆえ『パイドン』における他の哲学探求に関する箇所に関する解釈のための端緒となる。そして、そのみでなく、プラトンの他の対話篇、たとえば『パイドン』をはじめとした中期対話篇と初期対話篇を繋ぐ対話篇であるとされる『メノン』における想起説や、仮設の前提に基づく探求、原因の推論についての解釈、あるいは『国家』におけるアイデアの知識獲得の達成に至る哲学探求や線分の比喻等の認識のレベルに関する

解釈、そして、ミュートスとして想起説が示される、中期と後期の橋渡しとなる対話篇である『パイドロス』あるいは後期対話篇、たとえば分割と総合の方法といった探求の方法や、『ティマイオス』へと続く「ありそうな話」に関する解釈といったものへと繋がりうるプラトンの哲学の、特に認識論に関する哲学の展開や発展、広がりに関する解釈にも関わるものである。

## 1 哲学探求はどのようなもので哲学者はどのような者とされるか

『パイドン』62c-で、ソクラテスは、自身の最期に立ち会おうと集まった、そして自身の最期に際して悲しむ仲間たちに向かって、魂は不死であること、真に哲学する者は死の練習を行っていることを述べる。

たとえば、「生涯をまさに哲学の中で送った者は死にのぞんで恐れず、死んでからはあの世で最大の幸福を受ける希望に燃えているのが当然」(63e-64a)であるというソクラテスの確信の根拠を示すことが目指される。また、哲学者は「普通人とは違って、魂を肉体との結びつきからできるだけ解放(ἀπολύων)しようとする者」(64e-65a)であるとされる。すなわち、「浄化(κάθαρσις)……魂が肉体の縛めから解放される」(67c-d)ことを最も熱望する者であるとされる。しかし、哲学者は「魂が肉体的な悪と離れがたく結ばれている限り……真実を十分には獲得することができない」(66b)者であるとされる。

これらを文字通りに解すれば、『パイドン』における哲学者は、魂を肉体との結びつきからできるだけ解放しようとする者、すなわち魂の浄化を熱望する者であるが、魂が肉体を伴っている間は、イデアの知識を獲得することはできない者であるということになる。それゆえ、『パイドン』における哲学者は、他の何よりもまして智慧を愛し探求する者であるが、智慧の所有のために死を待つ者であるともいえよう<sup>(1)</sup>。

『パイドン』において、哲学者のこのような姿について述べられている箇所をひとつ、以下に示しておく。

「第一に、これらのことにおいては、次のことが明らかではないか。すなわち、哲学する者は他の人々とは異なり、魂を肉体との繋がりからできる限り(ὅτι μάλιστα)離し自由にする者であるということが？」——「明らかです」

この箇所ではソクラテスが「できる限り」(ὅτι μάλιστα)と述べているように、『パイドン』における哲学者は、魂を「できる限り」<sup>(2)</sup>自由にする者である。これらの箇所を見れば、『パイドン』における哲学者は、『国家』における哲学者のようなアイデアの知識を獲得できる者ではないと解することが当然であるようにも思われるが、それでは、そのような解釈は妥当であるといえるのだろうか。あるいはそうではなく、『パイドン』においても、哲学者は、肉体から魂が解き放たれていなくても、すなわち、肉体を持っている状態であったとしても、アイデアの知識を獲得できると解釈できる余地があるのだろうか。あるいは、たとえアイデアの知識を獲得できないとしても、肉体を持ち感覚する働きを用いることが、哲学探求において、何らかの(肯定的な)評価に値するものであるといえる可能性があるとするのが、妥当な解釈となるのだろうか。

## 2 肉体を持っている状態での探求の可能性

先にも挙げたが、『パイドン』において、哲学者は「魂が肉体的な悪と離れがたく結ばれている限り……真実を十分には獲得することができない」(66b)者であるとされる。しかし、そのように述べられていてもなお、肉体を持っている状態での探求の可能性に関して、肯定的に解釈する余地が、『パイドン』において、残されているのだろうか。

たとえば、Bostock<sup>(3)</sup>は、プラトンが感覚の軽視の理由を述べていないことに関する疑問を踏まえつつ、次の二点を主張する。第一点は、感覚からしか探求は始まらないということである。第二点は、肉体の中にある魂は感覚しているという点である。第一点に関しては、感覚により与えられる情報から探求を始められないなら、知的探求を行うことを説明できないと考えられるが、プラトンは明らかにこれに同意しないとする。第二点は、魂が推論していると同時に肉体が知覚したり欲求したり恐れたりといったことをしているという点について、プラトンは、この箇所まででは、このことを述べていないとしつつ、もしプラトンに従えば、肉体がどのように魂を混乱させるのかや、なぜ欲求や心の感情的な働きを取り除くことが魂の浄化とみなされねばな

らないのかといったことが問題となるとする。その上で、魂は実際に肉体においてなされることをしているとする。魂は肉体の中にあるがゆえ、魂が見る時、魂は肉体の目を通して見るのであり、目を具えている肉体を持っていないとき、魂はもはや見ることをしないだろうと主張する。Bostock は、知覚、欲望、感情、そしてこれらと同類の肉体の働きは、肉体の中にある魂において生じるが、肉体を持たない状態の魂においては生じないとする。Bostock の解釈は、このように、肉体をとおしてなされる働きをおこなう魂ということを前提としたものとなっている<sup>(4)</sup>。

たしかに、このような魂に関する検討は、アリストテレスにおける魂についての考察のように<sup>(6)</sup>肉体と共にある状態の魂の働きが問題となっている場合であれば、妥当なものであるようにも思われる。しかし、そのような魂の諸機能の検討は、『パイドン』において、そして特にこの箇所 (66-69) において、議論の対象としては想定されていないように思われる。

プラトンは、この箇所で、死ぬことは魂の浄化につながることを、哲学は魂の浄化の試みであることに關して記述しているといえよう。たしかに、Bostock が示しているような魂の諸機能は、魂が肉体とともにある場合にはこれらをなすし、またそのためには肉体が不可欠である。しかし、魂には Bostock が述べるような働きもあるが、それ以外の働きもある。プラトンがここで問題にしていることは、そのような肉体を伴うことでなされる魂の機能ではない。それら肉体を伴うものを魂から取り除いた場合に残されるもの、すなわち、肉体を伴わない魂のみによる働きを問題としているのである。その取り除きを「魂の浄化」と呼んでいるのである。このように、問いの設定として、魂の浄化としての哲学探求においては、はじめから肉体は不要なものであるとされる。それゆえ、プラトンはそもそも感覚を軽視している理由を述べる必要はない。もし述べるとすれば「それらは魂の浄化にとって不要であるから」ということであり、肉体から魂が切り離されることで魂の浄化がなされるということである。そもそも、魂の浄化の勧めが『パイドン』のこの箇所における議論の主要なテーマであるのだから、浄化されていない魂の諸機能は、肯定的な扱われ方をするものとしては、プラトンの議論の組上には乗らず、肉体を伴った機能は魂の浄化を妨げるのものであると文字通りに解することの方が、妥当であろう。

また、Bostock の解釈には、『パイドン』のこの箇所においては、探求の開始が問題になっているわけではないという点でも問題があるように思われる。たしかに感覚

からしか探求は始まらないかもしれないし、探求が始められなければ探求は達成されないが、この箇所において焦点が当てられているのは、誰かが探求を始めることではなく、哲学者が哲学探求を行うこと、そしてそれを達成させることなのである。それは、ソクラテス最後の日に彼のもとに集まり対話を行ったのが、『メノン』における奴隷の少年ではなく、シミアスやケベスといったピュタゴラス派の数学に通じた人達であったことから、明らかであろう<sup>6)</sup>。また、たしかに魂は肉体の中で感覚しているかもしれないが、だからといってそうであるという現状が、プラトンの（あるいはソクラテスの、そしてまた智慧を愛し哲学探求を行う者の）目指すものではないということである。

プラトンが考えていることは、感覚からしか探求が始まるのではなく、肉体の中にある魂が感覚しているという事実を述べることでなく、探求を成功的に達成すること、あるいはそれを目指すことと、そのためには魂が感覚から解放されることが重要なことであるということである。それゆえ、ソクラテスの主な対話相手にシミアスやケベスが選ばれたのだとも解されよう。そして、それを目指すことがすなわち哲学が死の練習であり、すなわち魂の浄化である——という解釈が、本論文での基本的な立場である。

また、Bostock の上記のふたつの指摘に関して、異なる反論をするとすれば、以下のようになるだろう。たしかにプラトンは、ここで問題にしている箇所において、直接は述べていないように思われるが、間接的には述べていると解することもできよう。プラトンは、魂の浄化を妨げるものとして肉体に関わる感覚や意識を哲学の探求において否定的に評価しているのだから、この対話篇の場面や状況の設定として、ソクラテス最後の日における哲学対話において、そこに多くの時間を割くことを避けたと考えることも可能であろう。そして、ここでの対話の主題が「魂の浄化」に集約されたと解することもできよう。

以上から、Bostock の解釈は焦点を外した議論であるといえるだろう<sup>7)</sup>。そして、これ以降では、ここまでの Bostock の解釈への批判を踏まえつつ、ここまでの示してきた解釈の妥当性について、哲学探求のレベルとその達成の可能性、そして哲学者が目指す魂の浄化に関して考察していく。

### 3 哲学探求と肉体、そして魂の浄化を目指すことについて

生涯を哲学の中で送った者は死に臨んで恐れることなく、死んでからはあの世で最大の幸福を受けるのが当然であるということの根拠を示そうとする (63e8-64a2) ソクラテスは、哲学者の探求に関して、哲学者は快樂に夢中にならない (64d2-e3) 旨を述べる。快樂に夢中にならないというだけでは、感覚の作用に関して何かを述べているというわけではないし、ここまでの対話を踏襲しつつ、哲学者は魂に関心を向け (64e4-7)、魂を肉体との結びつきからできるだけ解放しようとする (64e8-65a3) ことについて述べるだけでなく、人がこれと協力するなら、肉体は智慧の探求の妨げとなることと、感覚は厳密でも確実でもないことについて (65a9-b8)、そして、魂は肉体と共に何かを探求する時には肉体により欺かれるのは明らかであることについて (65b9-c1) 述べる。

このような対話に続いて、次のような対話がなされる。

「もし実際に、どこかでそれら在るもののうちの或るものが、魂に明らかとなるなら、それは推論すること (λογίζεσθαι) においてではないかね？」——「はい」 (65c2-4)

Burnet は、この箇所における λογίζεσθαι を、この語の元々の意味が算術的な計算 (そこから土地の測量、そして科学的推論へと意味が拡張される) であることから、数学的な推論であると解する<sup>6)</sup>。これに対して、Hackforth は、65e-66a において διάνοια (διανοεῖσθαι) と λογισμός の違いが意図されていないことと、66b4 における μετὰ τοῦ λόγου が 66a1 の μετὰ τοῦ λογισμοῦ の繰り返しであるとして、この箇所における λογίζεσθαι を、一般的な推論の意味であると解釈する<sup>9)</sup>。

この 65C2-3 のソクラテスの問いに続いて展開される対話 65d11-66a10 における対話において、ソクラテスは διανοηθῆναι (65e3)、διανοίᾳ (65e7, 66a2)、διανοεῖσθαι (65e8) と述べている (λογισμοῦ は 66a1)。ここで、ソクラテスとシミアスは次のように対話している。

では、君は視覚以外の肉体を通した他の感覚によって、それらに触れたこと

はあるだろうか？ 私はすべてのことについて言っているのだ、つまり大きさ、健康、強さ、そしてその他の、言わば全てのものの本質、それぞれのものがそれであるところのものについて。それで、これらのもっとも正しいものは、肉体を通して観想されるのだろうか、あるいは、次のようにして可能であろうか。探求の対象について、それぞれのものそれ自体を思考する（διανοηθῆναι）準備を、われわれの中で、最高に最も正確にする人なら、その人は、それぞれのものを知ることについて、最も近いところまでいける人であるのではないか？——たしかに。

それで、このような人が、最も明瞭な認識をなすのではないかね。つまり、最大限に思考（διανοία）それ自身によってそれぞれの探求の対象に近づき、視覚を思考すること（διανοεῖσθαι）の中にそなえつけることもせず、他のどのような感覚をも持ち込んで推論と一緒に（μετὰ τοῦ λογισμοῦ）することもなく、純粋な思考（διανοία）それ自体を用いて、それぞれの対象それ自体を純粋なまま捉えようと努め、肉体と魂が共にあり魂を掻き乱され魂が真実と思慮を手に入れることができなくなるとして、目や耳やいうなれば肉体全体からできる限り（ὅτι μάλιστα）自由になろうとする人ではないかね。それで、真実在にいたる人は、シミアスよ、このような人ではないかね？——まったくもって、あなたの述べることは正しいです、ソクラテス、とシミアスは言った。

(65d11-66a10)

この箇所から、διάνοια と λογισμός の箇所を抜き出して以下に示す。

探求の対象について、それぞれのものそれ自体を思考する（διανοηθῆναι）準備を、われわれの中で、最高に最も正確にする人は—— (65e2-4)

最大限に思考（διανοία）それ自身によってそれぞれの探求の対象に近づき—— (65e7)

視覚を思考すること（διανοεῖσθαι）の中にそなえつけることもせず—— (65e7-8)

他のどのような感覚をも持ち込んで推論と一緒に (μετὰ τοῦ λογισμοῦ) することもなく—— (65e8-66a1)

純粋な思考 (διανοία) それ自体を用いて、それぞれの対象それ自体を純粋なまま捉えようと努め—— (66a1-3)

これらを見ると、たしかに、διάνοια と λογισμός は、感覚とは離れた思考あるいは推論について述べるために、用いられている。それゆえ、Hackforth の指摘のように、65e-66a における διάνοια (διανοεῖσθαι) と λογισμός に関して、プラトンは、語の意味を明確に分けたりそれらの語に異なる意味を持たせたりして用いてはいないようにも思われる。しかし、だからといって同じ意味として用いているという解釈が適切であると解釈することは早計であるといえるかもしれない。それというのも、たとえば、この二語を、プラトンは、ある程度、異なる意味を持つ語として考えていたが、何らかの理由で明確に区別する必要がなかったから区別していなかったと解する可能性があるかもしれないからである<sup>(10)</sup>。

ところで、この二語は、λογισμός は『メノン』98a において原因の推論（この箇所において、原因について推論することこそ想起であるとされる）の説明の際に、διάνοια は『国家』の線分の比喩において (511d)、そして洞窟の比喩の後の箇所では哲学的問答のみが始原（第一原理）に至るとソクラテスが述べる箇所である 533d-e において補助的な学術の名称として、登場する。これらの箇所では、διάνοια は数学の探求のレベルにおける認識のレベルとされる。このように、これらの語は、プラトンの認識論の考察を行う上での重要な語であるといえる。その点を考慮に入れつつ、プラトンがここで用いているふたつの語を、ここでプラトンが意味を明確に分けているかどうかには拘らず、λογισμός に関しては『メノン』からの繋がりを、διάνοια に関しては『国家』への繋がりを持つと解するならば、Burnet の解釈に（部分的あるいは条件つきにであれ）与することも可能であるように思われる。

さて、διάνοια 系の語は、哲学は死の練習であり死は魂の浄化であることにに関する問答の中では、65d11-66a10 において集中的に登場していることに注目したい。もちろん、プラトンは、この箇所の執筆時点では、先述のように、διάνοια を自身の認識論において、まだ明確に位置づけてはいないかもしれない。しかし、この箇所にお



ける  $\delta\acute{\iota}\alpha\nu\omicron\iota\alpha$  系の語の出現回数が他の箇所と比べても突出していることから、プラトンが、『国家』における線分の比喻で明示されているような認識のレベルの分類と、その分類における数学の認識のレベルに関して、『パイドン』においては完成していないけれども、何らかの構想を持っている可能性があるという含みを持ちつつ、この箇所を読むことも可能であるともいえるかもしれない。65d11-66a10 における  $\delta\acute{\iota}\alpha\nu\omicron\iota\alpha$  系の語が、「それぞれのものそれ自体を思考する ( $\delta\iota\alpha\nu\omicron\theta\eta\eta\nu\alpha\iota$ )——」(65e2-4)、「最大限に思考 ( $\delta\iota\alpha\nu\omicron\iota\alpha$ ) それ自身によって——」(65e7)、「視覚を思考すること ( $\delta\iota\alpha\nu\omicron\iota\sigma\theta\alpha\iota$ ) の中にそなえつけることもせず——」(65e7-8)、「純粋な思考 ( $\delta\iota\alpha\nu\omicron\iota\alpha$ ) それ自体を用いて、それぞれの対象それ自体を純粋なまま捉えようと努め——」(66a1-3) と、純粋な思考について述べる際に用いられていることから、プラトンはこの時点で、 $\delta\acute{\iota}\alpha\nu\omicron\iota\alpha$  系の語には、(当然といえば当然であるが) 純粋な思考という意味を持たせていると考えられる。

同様に、 $\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\mu\acute{o}\varsigma$  に関しても、「他のどのような感覚をも持ち込んで推論と一緒に ( $\mu\epsilon\tau\grave{\alpha}$   $\tau\omicron\upsilon$   $\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\mu\omicron\upsilon$ ) することもなく——」(65e8-66a1) とあるように、感覚と共にすることのない認識という意味を持たせていると考えられる。また、先述の通り、この語の元の意味は計算であり、数学的な思考を表現する語であることも、考慮する必要があるだろう。

ここまでの考察を踏まえつつ、以下のように纏めることができよう。

- (1) 肉体は智慧の探求の妨げとなることと、感覚は厳密でも確実でもなく (65a9-b8)、魂は肉体と共に何かを探求する時には肉体により欺かれるのは明らか (65b9-c1) である
- (2) それらに在るもののうちの或るものが魂にとって明らかとなるなら、それは推論すること ( $\lambda\omicron\gamma\iota\zeta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ ) の中にある (65c2-4)
- (3) 思考 ( $\delta\acute{\iota}\alpha\nu\omicron\iota\alpha$ ) ・推論 ( $\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\mu\acute{o}\varsigma$ ) それ自身により、探求の対象へと近づく
- (4) 思考 ( $\delta\acute{\iota}\alpha\nu\omicron\iota\alpha$ ) ・推論 ( $\lambda\omicron\gamma\iota\sigma\mu\acute{o}\varsigma$ ) は、数学のレベルの探求に関わる

このように解釈することが妥当であるとすれば、(1) からは、次のことが言えよう。たしかに探求の開始において感覚は関わりを持つだろうし、魂は、肉体の中にいる以上、肉体との繋がりのなかで感覚しているといえるかもしれない。しかし、そのよう

な探求は、哲学における探求のレベルにはない。プラトンは、「感覚は厳密でも確実でもなく」「肉体により欺かれる」と述べていることから、これらのことを承知していると解されえよう。

(2)(3)(4)からは、次のことが言えよう。哲学探求により魂は思考・推論それ自身により探求の対象へと近づくが、プラトンは、思考も推論も数学的な探求のレベルであることから、この箇所の執筆時点で、数学のレベルの探求においてもそれを行うことが(程度の差はあるだろうが)可能であるとの見通しを持っていたと解されえよう。

では、魂の浄化(κάθαρσις)に関してはどうだろうか。ソクラテスは、先に挙げた65d11-66a10の後半、66a3-5において、「(それぞれのものそれ自体を思考する準備を、我々の中で、最高に最も正確にする人とは)目や耳やいうなれば肉体全体から出来る限り自由になろうとする(ἀπαλλαγείς ὅτι μάλιστα)人」と述べている。これは魂の浄化を説明しているものであるといえる。すなわち、肉体と共にあるうちは魂は肉体の働きである感覚作用を共に行うとしても、それは哲学探求を行おうとする魂にとって本意ではなく、そのような魂は肉体の諸々の働きから自由になることを求めるものである。そしてそれは、どのような感覚を用いることもなく純粋な思考それ自体を用いた探求であるということである。

ここまでの解釈が適切であれば、次のように言えるだろう。プラトンは、感覚から探求を始めることと魂も肉体とともに感覚していることについて、認めているといえる。なぜなら、肉体と共にある限り、魂にはそのような面もあるからである。しかし、それは、厳密でもなく確実でもなく魂を欺く肉体を通して得られた感覚によるものであるがゆえ、智慧の探求ではありえない。プラトンがこのような感覚に基づく探求を重視してはいないことは明らかである。プラトンが重視している探求は、そのようなものではなく、思考と推論に基づく探求である。そして、プラトンは、感覚に基づく探求から魂が解放され、純粋な思考それ自体を用いた探求を行えるような状態となることを、魂の浄化であるとする<sup>(11)</sup>。

しかし、このように解釈してもなお、魂は、肉体と共にある以上は、(イデアの知識の獲得という)哲学探求の達成に至ることはできないのではないか。少なくとも『パイドン』においては、そうであるといえる。もしそうであるとすれば、肉体と共にある魂が行うイデアの知識を獲得するには至らない哲学探求について、『パイドン』の

読者は、イデアの知識が獲得できないという悲観的な状況を受け入れるしかないであろうか。そして、哲学探求の成果に関して、悲観的とならざるを得ないのであろうか。そうであるなら、哲学や知性を欠いた慣習や訓練から生ずる通俗的な市民道徳に励んだ人たちと同様であることになってしまうのであろうか。

#### 4 探求する者により探求のレベルが異なることについて

ここで、第一章で引用した箇所を、もう一度取り上げるとしよう。

「第一に、これらのことにおいては、次のことが明らかではないか。すなわち、哲学する者は他の人々とは異なり、魂を肉体との繋がりからできる限り (ὄτι μάλιστα) 離し自由にする者であるということが？」——「明らかです」  
(64e8-65a3)

この「できる限り (ὄτι μάλιστα)」(65a1) に注目したい。たしかに『パイドン』においては、哲学者は、肉体と共にある以上、イデアの知識を獲得するという哲学探求の達成に至ることはできない。しかし、哲学探求を行う者は、自分の能力の限り、探求を行う者であるということが、この箇所において述べられていると解することもできるだろう。そしてそのような者は、「死後、神々の種族の仲間となることなく、自分たちに似た社会的な生き物である蜂等の仲間入りをするかもしれない、通俗的な社会道徳を心がけてきた者」(82a-b) とは異なるのである。

哲学探求は、通俗的な社会道徳を心がけてきた者や欲望に囚われている者が行わないのは当然であるが、だからといって、ソクラテスのみが行いうるものであって他の者はたとえソクラテスの仲間であっても行い得ないというようなものではないだろう。たとえば、想起説に関する問答の中で「しかし明日の今ごろにはもう今しがた我々が議論していた事柄(等しさそのもの、美そのもの等)について十分に説明できる人はいなくなってしまうでしょう」(76b10-12) とシミアスが述べるが、十分に説明できる人はいなくなってしまうかもしれないが、不十分ながらも哲学探求を行う者(あるいは行おうとする者)は、シミアスやケベスや、そして『パイドン』においては「病気だったと思われる」(59b10) ためにこの場に立ち会っていなかったとされるプラ

トンらが、まだこの世界に残っているのである。では、ソクラテス以上に哲学探求を行うことができない者、すなわち不十分ながらもそれを行う者による哲学探求は、どのような哲学探求であると考えられるだろうか。

哲学探求に関して、McPherran は、『ソクラテスの弁明』等を踏まえつつ、ソクラテスの哲学活動を、ある意味で個人的な使命であると理解されるべきことを強調する。そして、ソクラテスの仲間たちが彼の真似をしてエレンコスを行うとしたら、その者は自分自身の意思でそうするのであると主張する。そして、この点を踏まえつつ、たとえ積極モード（と McPherran が述べるような）による哲学の探求を我々が行わなかったとしても、ソクラテスは我々を道徳的に罪があるとは考えないとする。そして、ソクラテスが道具主義的限定を認めていたと暫定的に考え、哲学は、その活動がそれに関係するすべての者の道徳的向上を帰結すると想定されるその程度にまで、実践されるものであるとする<sup>(12)</sup>。この McPherran の立場に、部分的であれ条件つきであれ、与するならば<sup>(13)</sup>、『パイドン』において魂の浄化を目指し哲学探求を行う者により、おそらく、その者の可能な程度まで哲学探求が行われるものであるといえるようにも思われる。

先に言及した「できる限り」（ὅτι μάλιστα）においても、このような意味が含意されていると解することで、哲学探求は、肉体を持っている以上はたとえそれを達成できないとしても、それを行う者にとって、できる限り魂を肉体から解放する、すなわちできる限り魂を浄化することを試みることであるといえよう。そして、このことこそ、プラトンが『パイドン』において魂の不死の証明を行おうとするソクラテスらの対話の底流に置いたものであるといえよう。

## まとめ

このように、『パイドン』における魂の不死、死の練習としての哲学探求、あるいは哲学探求そのものについての検討がなされた。哲学する者による探求は、肉体を持っている以上、探求を達成できないとしても、行う者の能力の限りにおいて行われるものであるといえよう。そして、『パイドン』においては、ソクラテスとその仲間たちによる魂の不死や魂の浄化に関する対話がなされる箇所、特に 65-66 の箇所においても、数学的な思考（διάνοια）・推論（λογισμός）が、肉体を伴わない認識のレベル

であると解されうることが示されたといえよう。

## 註

- (1) Vasiliou, p.10
- (2) その他、65c7、65e7、66a4 等において、このように語られる。
- (3) Bostock, pp.26-27
- (4) Bostock, pp.22-25
- (5) この点に関しては、Bostock も認めている。(p.23)
- (6) 彼らの経歴については、たとえば、Burnet (1911) pp.9-10 や、松井 (2004) 254 頁の註 4 を参照せよ。
- (7) もちろん、たとえば『パイドン』における想起説に関する議論において等、感覚の役割に対して、適切に解釈するならば、感覚を Bostock の解するほどには肯定的には扱えないとすることは妥当であるといえるのであろうが（このような議論については、たとえば、松井 (2004) を参照せよ）、本論文において扱っているのは、死の練習としての哲学であるから、そのような方向に議論を進めることはない。
- (8) Burnet, pp.31-32
- (9) Hackforth, p.46
- (10) 思考 (διάνοια) と推論 (λογισμός) に関する詳細な検討は、それ自体で大きな問題であるが、紙幅の都合もあり、本論文では詳細な検討は行わない。
- (11) 本論文においては、魂の浄化 (κάθαρσις) を問題の中心と据えていない。これ自体がどのようなものであるかについての考察、また思考・推論（先述の註のとおり、これらの相違を踏まえつつ）との関係等、考察を深めるべき問題は多いが、今回は紙幅の都合上扱わない。
- (12) McPherran, pp.237-238
- (13) ではその実践はどの程度のものでありどのようなものであるのかという問題に

関して、プラトンにおける哲学探求のレベルを踏まえた上での検討の必要はあろうが、本論文では紙幅の都合上、行わない。

### 参考文献

- ・ Bostock, D. *Plato's Phaedo*, Oxford, 1985
- ・ Burnet, J. *Plato Phaedo*, Oxford, 1911
- ・ Hackforth, R. *Plato's Phaedo*, Cambridge, 1955
- ・ McPherran, M. L. *The Religion of Socrates*, Pennsylvania, 1999 (『ソクラテスの宗教』法政大学出版局、2006年)
- ・ Vasiliou, I. From the *Phaedo* to the *Republic*: Plato's tripartite soul and the possibility of non-philosophical virtue, Barney, R., Brennan, T., Brittain, C.(ed), *Plato and the Divided Self*, Cambridge, 2012, pp.9-32
- ・ 松井貴英「想起と数学」『哲学』55号、2004年、243-255頁